

## ストラスブール研修で学んだこと

011700040 文学部 市川陽南子

私は3月上旬の2週間、語学研修でフランス東部のストラスブールに滞在した。語学の勉強や専攻しているフランス文学を学ぶ上で大きな助けとなりそうな経験（美術館や教会を訪れたことなど）もしたが、それ以外にもたくさんのことを学べた。ここでは、その中でも特に私にとって重要だったことを3点紹介しようと思う。

まず一つ目に学んだことは、あまり知られていない都市を訪れ、そこの素敵などところを見出してゆくことの楽しさだ。私は終日フリーの日にアルザス地方の都市を巡る計画を立てていた。友人たちがアニメや映画などの舞台のモデルとなったことで有名なコルマルに行くと聞いたので、午前中は彼女たちに同行することにした。そして私がアルザス地方で最も訪れたかった都市がミュルーズだ。この都市はアルザス第二の規模でありながら、ストラスブールやコルマルに比べ観光的な知名度は低い。だが自動車や鉄道などの博物館や美術館がたくさんあるので、私はぜひ訪れてみたいと思っていたのだった。親しくしていた研修参加者たちはミュルーズに興味を示さなかったので、午後は一人でミュルーズに行くことにした。しかしながら、諸般の事情でコルマルでの滞在時間が長くなってしまったためミュルーズ駅に到着したのは午後3時半を過ぎてしまった。そのため、体力や美術館の閉館時間なども考慮して訪れる美術館を一つに絞ることにした。そこで、私は服飾分野に興味があったので、プリント生地博物館（Le Musée de l'Impression sur Étoffes）を訪れることにした。工業都市であるミュルーズはプリント生地産業でも繁栄していたため、このような博物館が作られたのだ。窓口や売店のスタッフはとても親切で、名大の学生証を見せると日本からの来館者が珍しかったのか学割料金からさらに20サンチーム割り引いてくれた。また美術館の展示もとても興味深く、歴史的な布地やプリント機械だけでなく企画展（私が訪問した際は花柄プリント生地の展示が行われていた）のテーマに沿った、レオナルドやアニエス・ベーなどの服や写真の展示もあり、とても満足できる訪問となった。この博物館がユニークであったと感じた他の点としては、チケットとして柄の入った小さな布切れが渡されたところが挙げられる。プリント生地の博物館だけあって、細かいところも凝っているのが素晴らしいと感じた。2時間ほど博物館に滞在した後は街の中心の広場に行ったが、カーニバルの期間中であったのでいくつか食べ物を売る屋台が出ていた。私はそのうちの一つで砂糖とバターのみが入ったフランス風のシンプルなクレープを食べた。店員の男性は一見無愛想に見えたが、バターや砂糖の加減を聞いてくれたり、屋台の近くで私がクレープを食べていると「C'est bon? (美味しい?)」など話しかけてくれたりと、とてもフレンドリーであった。すっかり夜になっていたのでその後は街を散策しただけだったが、ミュルーズが楽しく魅力的な都市であるということを十二分に見いだせた訪問だった。

二つ目に学んだことは、同年代の人々と交流することの楽しさだ。私はこれまであまり人と積極的に交流することが少なかった。日本にいる時は、一人で過ごすことが好きなことも

ありそれほど気にしていなかったが、研修に参加する前は「ほとんど知らない人たちと2週間も共に外国で過ごすなんて、途中で精神的苦痛に襲われるのではないか」と大きな不安を抱えていた。同じ学年、学部の女子学生数名とは研修前から顔見知りであったが、とても親しいわけではなかったのも不安は残ったままだった。しかしながらストラスブール到着後は彼女たちだけではなく、他学年、学部の参加者たちとも食事を共にし街を探索することで仲良くなれた。またストラスブール大学日本語学科の学生たちとも交流することができた。私はフランスのロックやポップスに興味を持っていたが、現地の学生たちは私の好きなグループを知らず「フランスの若者たちは英米の音楽ばかり聴いていて、フランス人の音楽は聴かない」と言われた。そのような、衝撃的な音楽事情を知ることができただけでも有意義であったが、学生の中に音楽通がいて私におすすめのフランス人音楽グループをいくつかも教えてくれた。今、私は少しずつそれらの音楽を聴き進めているが、どれも私の好みに合っており彼と話すことができ良かったと心から思っている。他にも前述のミュルーズ出身の学生がいたのだが、彼女と話した際私がミュルーズを訪れ、とても楽しい時を過ごせたと話すとても嬉しそうにしていた。このように、日仏問わずたくさんの同年代の人々と交流することができて、その楽しさを味わうことができた。そして、これからは日本でも他者ともっと積極的にコミュニケーションしてみようと思った。

三つめに学んだことは、フランスの食事の美味しさである。研修参加前に、前年の研修に参加した先輩から、「食事が口に合わない人が多いから、気を付けたほうがいい」と言われ、私は少しその点も不安に思っていた。しかし実際にストラスブールで食事をとると、どれも美味しく私にとっては日本の食事よりも合っているのではないかと感じるほどだった。私は幼い頃から肉と乳製品、とりわけ牛乳とチーズが大好物であったので、スーパーで大きな牛肉やチーズの塊が日本よりはるかに安価（2～5ユーロほど）で売られているのを見て、「日本にもこんなスーパーがあったらいいのに」と強く願うほどであった。飲食店での食事量も量こそ多いと感じたものの、毎日たくさん歩いたからか（一日平均25000歩ほど）、体の不調もなく極めて健康に過ごせた。

出発前は大きな不安に襲われたこともあった当研修だが、終わってみるととても有意義な経験ができたと心底感じているし、日本に帰国して現地で買ったお菓子や乳製品などを口にしていると「ストラスブールに戻りたい」との思いに強く駆られる。この文章を読んでいる方の中には研修に参加しようか迷っている人もいるだろうが、私は参加することを強く勧めたい。